

小西 潤 / Jun Konishi

1974年群馬県生まれ。

ヒコ・みづのジュエリーカレッジ FAA科にて伊藤一廣にジュエリーを教わる。2001年、ミュンヘン国立造形美術大学ジュエリー科へ入学。オットー・クンツリ教授よりマイスターシューラーを取得。2009年、日本へ帰国し、国内外で作品を発表する。2010-2020年、伊丹ジュエリーカレッジ講師。2016年より福井市にある talklein を谷口かおりと運営。

パブリックコレクション / Pinakothek der Moderne, Die Neue Sammlung (ドイツ)、Marzee collection (オランダ)、Bollmann collection (オーストリア)、Dallas Museum of Art (アメリカ)、Rijksmuseum Amsterdam (オランダ)



talklein HP

plastic circle objects

2010-2023年 / plastic circle を繋ぎ合わせたかたち

plastic circle

2010年 - / プラスチック製品の表面を円形に重なるように彫刻刀で切削

C1049

2010年 / 炭素繊維強化プラスチックを切削し穿孔

zinc

2004年 / 亜鉛メッキ鋼板を金で溶接し穿孔

それ自体を含まないもの 小西潤を介して

藤井 素彦 (新潟市美術館学芸員)

あなたは、それを身に着ける。その理由は何だろうか。ジュエリーは、装身具という用途（使用価値）とか、希少性や価格（交換価値）だけでは定義できない。工芸分野の一つ（生産手段）というのも充分ではない。ジュエリーとは、あなたと誰かのあいだに結ばれ・切り離される「関係」への問いではないか。つまり、あなたの「ための」ものというより、あなたと誰かの関係や、あなたとあなたの身体の関係に「ついての」ものなのである。ここではジュエリーを、問い、もしくはコンセプトであると考えよう。それは作業の成果というより、考察の対象なのだから、小西潤「の」ジュエリーは存在しない。小西潤「と」ジュエリーというように、ここにも「関係」だけがあるわけだ。

決して財貨とは看做されないような工業素材を、小西はジュエリーにする。8オンスの煙草と1冊の詩集が等価であり得る、というような、奇妙ではあっても普遍的な状況（ないし社会構造）が、そこではあけすけに示される。しかし厄介なことに、小西の加工を経た工業素材／ジュエリーは、この上もなく精緻なのだ。それは厳格に推敲された詩集のようであるが、そもそも煙草のようにありふれたものなのである。

マルクスは「人間は常に自分が解決し得る課題だけを自分に提起する」（『経済学批判』序）と言う。この恐ろしい断言は、小西には当てはまらない。ジュエリーは答え、解決ではないからだ。小西の考察／制作は、一般には区別されるもの（煙草と詩集）を一つに繋げることであり、同時に、区別されないもの（等価の商品）を敢えて区別することでもある。AとBの区別や、その関係が問われている。問い、もしくはコンセプトである。

これらのジュエリーは、鋭利な切削工具で制作されている。廃棄されたトタン板を小さく切り分け、溶接し、黒く変色させ、穴を開ける。炭素繊維強化プラスチックという超硬質な素材を短く切断し、穴を開ける。柔らかなプラスチックを刃物で薄く削ぐと、その切片は丸まって輪になり、一つの穴となる。素材を不可逆的に損ない、穴を開ける。こうして、素材はジュエリーになる。穴を開けることを、小西は「素材に身体性を加える」と言い表す。ジュエリーは損なわれている。傷であり、穴である。あなたの身体を、他の何か・他の誰かに結合し、拘束する輪であり、鎖である。

ジュエリーは、それ自体では完結しない。穴が開いている。穴それ自体は存在しない。そして人間にも随所に穴のような部位がある。そこには身体の内部が露出する。それ自体としては決して充足しない。小西は刃物で損なう。損なわれたものをあなたの身体にあてがう。あなたも傷であり、傷によって開かれている。「それ自体を含まないもの」の非完結性や連結性を、小西潤はジュエリーとして可視化している。ジュエリーは、あなた／他者のあいだに挿し込まれたスラッシュなのである。隔てのように見えるが、隔てを斜め上に越える小さな矢印でもある。スラッシュは、「AもしくはB」と同時に、「AとB」も意味する三者択一なのである。

「小西潤とジュエリー〈身体性に介入 / 介在するかたち〉」展のために
新潟市美術館 2023年11月18日～2024年1月21日